令和2年6月 日本遺産認定

八代（たがや）を創造した石工たちの軌跡

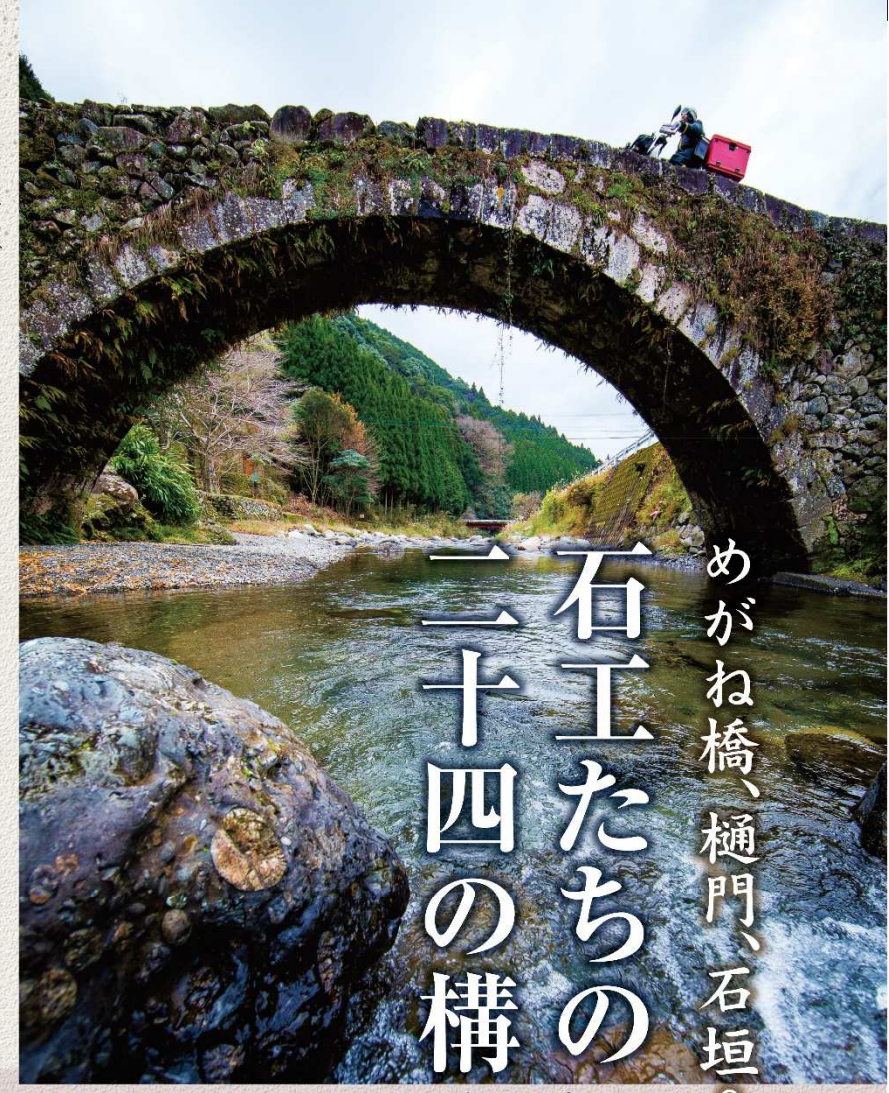
～石工の郷（さと）に息づく石造りのレガシー～

A Legacy of Stonework : the craftsmanship of Yatsushiro's masons

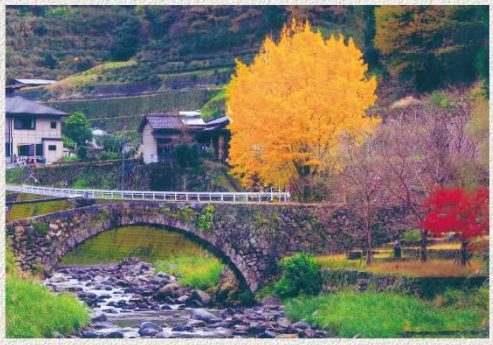
令和2（2020）年6月19日、熊本県八代市に残るめがね橋や干拓樋門（ひもん）など、石造りの文化に関する構成文化財24件を物語として紡いだ「八代を創造（たがや）した石工たちの軌跡～石工の郷（さと）に息づく石造りのレガシー～」が、日本遺産に認定されました。

八代の地に今なお残る、卓越した技術で築かれた遺産の数々。脈々と受け継がれてきた石工たちの活躍の足跡や見どころをご紹介します。

熊本県八代市



河俣川に架かる笠松橋。ノミの加工跡など、種山石工の技術力の高さを間近で感じることができます。今でもバイクや徒歩での通行可能、生活道路としても欠かせない貴重なめがね橋です。地元では、橋本勘五郎の作とも伝えられています。



春には咲き誇る桜、秋には黄葉するイチョウ、冬には雪景色など、四季折々の姿が楽しめます。

めがね橋、樋門、石垣etc…
石工たちの技が光る二十四の構成文化財

熊本県南部に位置し、県内第2位の人口を抱える八代市。八代の人々は、阿蘇山の噴火活動により堆積した凝灰岩や良質な石灰岩の地層が点在する環境を活かし、古来より地域で採れる石材を活用したまちづくりを行ってきました。八代城の石垣、干拓樋門、石積みの棚田、めがね橋など、八代各地に現存するこれらの石造り建造物の数々は、多くの石工を輩出した"石工の郷"の風土が、この地で脈々とはぐくまれてきたことを物語っています。

石工たちの技を昇華させた石造りの「めがね橋」

八代市内には、江戸～昭和初期にかけて建造された、県内最多の46基のめがね橋が現存しています。このうち22基が集中するのが、市北東部の東陽町。町中心部から県道を東に約6㎞。

鍛冶屋下橋（かじやしもばし）

種山石工の始祖・林七の習作と伝わる八代で最も古い時代に架けられためがね橋。石匠館の傍を流れる小川に鍛冶屋上・中・下の3橋が架かっており、いずれも徒歩圏内。わずか数歩で渡れる小規模な橋ながら自然石の美しいアーチが特徴的です。

鑑内橋（かんないきょう）

岩永三五郎が架橋したとの伝承が残り、天草砂岩を使用しているのが特徴。種山石工と天草の石工との交流が見て取れます。

鹿路橋（ろくろばし）

橋本勘五郎の父・嘉八によって架けられたと言われています。橋長は20mを超え、現在も徒歩で渡ることができます。

八代を創造（つくり）した石工たちの軌跡

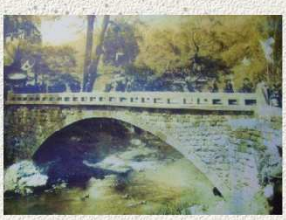
現在はめがね橋を覆うように鉄橋が架かり、欄干の親柱には架橋当時の刻印なども残されています。

東陽町に現存する最も新しいめがね橋

谷川橋（たにがわばし）

昭和4(1929)年、石工・田上甚太郎が架橋したという記録が残り、八代市に現存するめがね橋では最も新しいめがめ橋です。付近で採石された溶結凝灰岩を用いており、建設中の風景や渡り初めの写真なども現存。橋を渡ったところに河俣阿蘇神社や保育園などがあり、現在も生活道路として利用されています。

建設中の谷川橋



昭和4年3月、渡り初め時の写真。地域住民の期待の大きさが伺えます。

国道443号沿い、白髪岳を祀る菅原神社の奥に見える天然の石橋。現地で見る迫力は写真以上！

！
この天然橋は、落石・崩壊のおそれがあり大変危険です。見学の際には、橋の真下に近寄ったり登ったりしないでください

石工たちがアーチ構造のヒントを得た

白髪岳天然石橋（しらがだけてんねんいしばし）

東陽町の白髪岳東麓にあるアーチ橋状の形をした岩盤です。9万年前に起った阿蘇の火砕流が堆積して溶結凝灰岩が、長い年月をかけて浸食され、現在のような形が作り出されました。地元の集落には、「白髪岳の天神様が山を下りて来られる際、道を塞いでいた大岩を蹴り破ってできた」という伝説が残っています。蹴破った時の破片と言われている岩が、今も田んぼの真ん中に大切に残されています。

白髪天神が橋の下の岩を蹴破って飛んできた破片と伝わる石。

河俣川に架かるアーチ橋が、東陽町最大級の「笠松橋」です。通潤橋（熊本県山都町）などを手掛けた橋本勘五郎が明治初期に建造したと伝えられています。ショウガの棚田が広がる里山の風景に溶け込み、今も生活道として使われている現役の橋です。

「めがね橋」の架橋技術は、多くの石工たちが生活した山間部の種山地域（現東陽町）を中心に、八代各地で脈々と受け継がれてきました。この石工集団は実用性を重視し、できるかぎり費用を抑えながらも丈夫な石橋を架け続けました。石工たちは、石材加工技術だけでなく、依頼主の要望に応じた細やかな設計、人脈を駆使した人材・資材の確保、資金運営までをトータルで行い、日本最高峰のめがね橋架橋技術を有する技術者集団へと成長していきました。

明治以降、風水害に強い石造建築物の需要が高まり、橋本勘五郎に代表される優れた石工たちは、東京の「神田筋違橋（萬世橋）」をはじめ、矢部村（現山都町）の「通潤橋」など、活躍の場を日本全国にまで広げ、日本の近代化の足元を支えました。また、かつて全国で二千基以上架けられた「めがね橋」の多くの架橋に八代の石工が携わったとも伝えられ、その名声は全国に轟き、八代は〝石工の郷〟と呼ばれるようになったのです。

二見川に架かる6つの眼鏡橋の中のひとつ。嘉永5年(1852)頃の架橋と言われています。

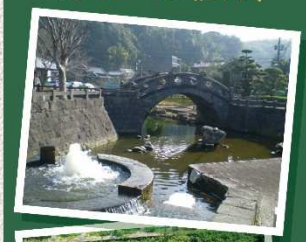
豪雨災害にも耐えた頑強なめがね橋

赤松第一号眼鏡橋（あかまつだいいちごうめがねばし）

二見赤松町の町外れ、旧薩摩街道に架かるめがね橋です。令和2年7月豪雨による河川の増水で勾欄の一部が壊れたものの、本体に大きな傷みもなく現存しており、種山石工の優れた技術が裏付けられました。橋の両側の勾欄には、扇面やひょうたん等の色々な彫刻が施されており、石工たちの技術の高さと遊び心に心なごみます。橋長12.3m、橋幅3.8mと小ぶりなめがね橋ながら、西南戦争の際、この橋を西郷隆盛率いる薩摩軍が通ったかも知れない…と思うと、歴史ロマンに胸が熱くなるものがあります。

橋の両側の勾欄には扇面やひょうたん等の彫刻が施されています

八代市内のめがね橋群



八代市内には、江戸時代～近代に架けられためがね橋が46基現存しています。壁石は自然石の乱積で質素ながら、アーチ部分は加工を施した石材を用いるなど、費用を抑えながらも丈夫な橋を架ける工夫が見て取れます。

干拓でもたらされた広大な八代平野

八代地域は、球磨川や氷川（ひかわ）の豊かな水に恵まれ、広大な三角州が広がり、干拓にも適したところでした。八代平野の3分の2は江戸時代から行われてきた干拓によって生まれた土地で、全国屈指の干拓地としても知られています。

今では圃場整備や用排水路の整備が進み、全国でも有数の生産高を誇る農業地帯となり、稲作、い草栽培、施設園芸などが営まれています。特にい草、冬トマトの生産高は日本一を誇ります。干拓地で車を走らせていると、その道がかつて海岸線に築かれた堤防の跡の上であったり、道の両脇の土地の高さが違っていたりと、先人たちが長い年月をかけ切り拓いて来た干拓への熱い想いを体感することができます。

干拓事業と石工の活躍

現在は熊本県有数の農業地帯として知られる八代平野も、かつては「お国一の貧地」と呼ばれるほど平野地が狭く、農業には向かない湿地と干潟が広がる地域でした。そのため、江戸時代から昭和初期にかけて大規模な干拓事業が幾度となく行われました。干拓事業には膨大な数の人夫が動員され、石工たちも石材の切出し、運搬、加工の担い手などに携わりました。

特に、文政元～2（1818～1819）年に行われた四百町新地、文政4（1821）年に行われた七百町新地の造成事業では、石工たちは大いに活躍しました。「大鞘樋門群（おざやひもんぐん）」に代表される干拓樋門、干拓地を潤す「用水路」、橋の建築などに大きく貢献しました。

その中でも、石工「三五郎」は、七百町新地造成の際に、石工たちの総取締役に任命され、多くの石工たちを率いて干拓事業の成功に大きく貢献しました。その功績が高く評価された三五郎は、職人では特例で「岩永」の苗字を名乗ることが認められました。

八代平野の大規模な干拓事業を契機として技術を磨き上げた名もなき石工たちは、〝名石工〟として歴史の表舞台に踊り出ていったのです。

美生地区の生姜棚田（びしょうちく しょうがたなだ）

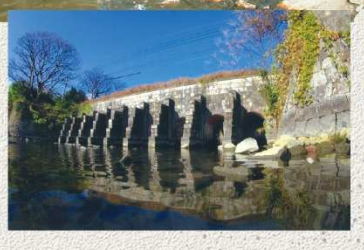
地域住民と石工たちが協力して造成されたと伝えられており、山肌を覆う美しい石積みで「日本の棚田百景」にも選ばれています。現在は特産のショウガが栽培されています。

大鞘樋門群（おざやひもんぐん）

文政2（1819）年、四百町新地干拓事業で建造された樋門。城郭の石垣に用いられるような巨石が使用されているのが特徴です。

郡築二番町樋門（ぐんちくにばんちょうひもん）

昭和13（1939）年に建造された3連アーチの樋門。この時期に建造された樋門の多くがコンクリート造りであるのに対し、石造であるのが特徴的です。



旧郡築新地甲号樋門 附・潮受堤防（きゅうぐんちくしんちこうごうひもんつけたりしおうけていぼう）

明治時代の郡築新地の干拓事業で造られた石造10連アーチの樋門。高度な石材加工・建築技術が用いられ、現存する石造樋門として国内最大規模。1世紀以上経った今も現役です。

大鞘節／大鞘名所

江戸時代に干拓事業に従事した労働者が歌った民謡。唄・太鼓・三味線などに合わせて、天秤棒や鍬を持って踊るのが特徴です。八代新地大鞘節、芝口大鞘節、碇原おさや名所などが今も人々に親しまれています。

芝口棒踊り

七百町新地に入植した人々により収穫祭や娯楽として披露されるようになった踊り。

女相撲

女性以外は土俵に上がれない全国的にも珍しい民俗芸能。干拓地の潮止工事が難航し、周辺の村から集めた屈強な力士に潮止口を踏み固めさせ、無事完成させたのが始まりだとか。

石工の活躍がもたらした豊かな文化

八代で歌い継がれる干拓民謡「大鞘節」

石工たちが活躍した干拓事業は、広大で実り豊かな平野だけでなく、入植者とともに〝大鞘節〟や〝女相撲〟といった個性豊かな文化も八代にもたらしました。干拓平野では、生産量日本一を誇る「い草」をはじめとするさまざまな農産物が生産されているのみならず、工事の苦労を偲んだ干拓民謡や伝統芸能が今も受け継がれ、その多様で独自の文化は八代に賑わいを与え続けています。

また、石工たちの生活拠点であった山間部には、めがね橋だけでなく、石工たちの高度な技量と遊び心を垣間見ることができる〝ひねり灯籠〟や、山肌を覆う美しい石積みの棚田の風景などが残されており、「石工の郷」の雰囲気を醸し出しています。

セメント・コンクリート時代の到来とともに、めがね橋をはじめとする石造建築物の需要は減少。建て替えにより数十年で日本各地から姿を消し、石工たちの姿も途絶えていきました。しかし八代では、干拓樋門やめがね橋など、数々の石造建築物が百年以上経った今でも地域に根付き、人々に大切に受け継がれ、生き続けています。それらは近代化する日本の足元を支えた石工たちの活躍を今に伝え、訪れる人々を〝石工の郷〟へと誘う、時代を超えた懸け橋となっています。

ひねり灯籠

90度ねじれたように彫刻された珍しい灯籠。若宮神社の灯籠は橋本勘五郎作。菅原神社の灯籠は石工・文八の作で、さらに90度ねじれており、石工の遊び心、技術の高さが伺えます。

菅原神社

国道443号線沿いに建つ神社で白髪天神が祀られています。境内には「ひねり灯籠」があり、境内の横から「白髪岳天然石橋」が、裏の田んぼの中に蹴破ったといわれる石を見ることができます。

岩永三五郎

寛政5(1793)年、現在の氷川町野津生まれ。肥後の名石工といわれ、特にめがね橋の築造についてすぐれた技術をもっていました。七百町新地の干拓工事に参加し、三五郎井樋を築き、麓川にもめがね橋、暗渠等を工事し、氷川の薩摩堰の補修など、八代郡内をはじめ、布田保之助の矢部郷開発にも携わりました。天保11(1840)年頃、薩摩藩に招かれ、甲突川の五大橋中、重要文化財の西田橋などを架橋。鏡町にただ一つ残っている鑑内橋も二五郎の作と伝えられています。

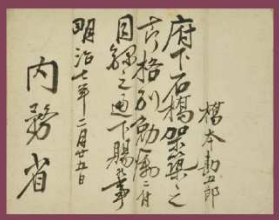
橋本勘五郎

文政5(1822)年、種山村生まれ。元の名は丈八。長兄宇助・次兄宇市とともに御船川橋を架設、矢部の通潤橋架設時は副頭で石工頭の宇市を補佐しました。明治改元頃に橋本姓を賜り、勘五郎と改名。その後明治政府に招聘され上京し、「神田筋違橋(萬世橋)」などを架設。帰郷後は県内に「明八橋」「明十橋」(熊本市)「下鶴橋」(御船町)などを架設しました。石工としての技術のみならず、大工や土木の知識、豊富な人脈など、現代で言えば大手ゼネコンの社長のような人物だったようです。

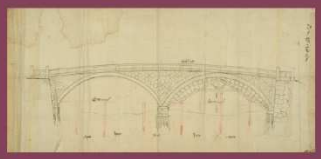
鹿子木 量平

宝暦3(1753)年、飽田郡鹿子木村(現熊本市北部町)生まれ。鹿子木村庄屋を務めているときに雲仙の大噴火があり、大津波におそわれた村の救済に尽力した功績が藩に認められ、益城郡杉嶋手永の惣庄屋に任命されました。文化元年(1804)年、野津手永の惣庄屋となり、干拓による新田開発を藩に願い出てこれを実行。百町新地・四百町新地・七百町新地など、短期間で新田開発に成功しました。没後、彼の偉業を讃えて建立された文政神社には、今も献花が絶えません。

橋本家文書



八代の石工の代表的存在である橋本家の文書で、めがね橋の設計図や見積書などが残されています。技術者・設計者・経営者として全国で活躍した八代の石工の高い能力を示す貴重な資料です。

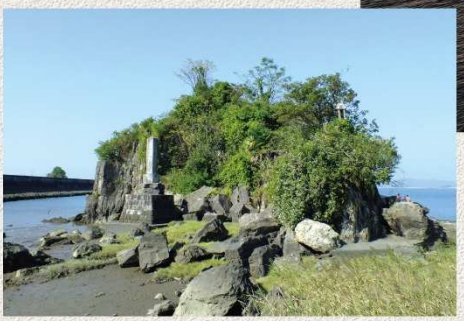


ヤマトタケルの父・景行天皇も立ち寄った
球磨川の河口に浮かぶ景勝の地

水島（みずしま）

元は水島新地の守護神として水島新地堤防の上に祀られていた「龍神社」。昭和36(1961)年、海岸堤防工事により現在地に移されました。

八代海の潮の満ち引きによって醸し出される神秘的な雰囲気が漂う「水島」。



干潮時には徒歩で島に渡ることもでき、島内には「景行天皇御巡幸之碑」が建てられています。

近くには「万葉の里公園」が整備され、長田王の歌碑も建てられています。

八代の市街地から約5㎞。球磨川の河口にある水島は、「不知火及び水島」として知られる国指定の名勝です。日本書紀にも、景行天皇が九州巡幸でこの地を訪れたと記載されています。食事休憩で飲み水がなく、家臣が神に祈りを捧げたところ、島から水が湧き出たという伝承からその名が付けられました。また万葉集にも、長田王（ながたのおうきみ）が水島を詠んだ歌二首が収められており、清少納言も枕草子の中で水島をとりあげています。

江戸時代末期、水島新地が造成される際、水島は干拓地の中に取り込まれる計画でしたが、万葉の古跡が失われることが憂慮されたため計画を変更、島として残されることとなりました。全国で取り組みが進む文化財保護の先駆けといえるでしょう。朝夕にはとても神秘的な雰囲気が漂い、水島の向こう、八代海の先にうっすらと浮かぶ天草諸島の風景もまた絶景。八代海では夏場には海の上に炎が立ち並ぶ"不知火（しらぬい）"という蜃気楼現象を見ることもでき、大自然のエネルギーを体感できるパワースポットとしても人気です。

白島（しろしま）

良質な石灰岩を産出する島で、八代城の石垣にこの島の石灰岩が使用されています。石工たちが関わった干拓により、現在は陸地化しています。

麦島城跡（むぎしまじょうあと）

天正16(1588)年、キリシタン大名・小西行長が築城した城で、石垣に八代で産出する石灰岩が用いられているのが特徴。元和5(1619)年に大地震により倒壊し廃城となりましたが、その後石垣の多くは八代城築城の際に転用されました。現在も石垣の一部を見ることができ、石工の活躍だけでなく、四百年前の震災の記憶を今に伝えています。

八代城跡（やつしろじょうあと）

【八代城跡群】

元和8(1622)年、加藤正方が麦島城の石垣を転用した石材や八代産の石灰岩を用いて築城。加工の難しい石灰岩を積み上げた石垣は、石工たちの技の高さを物語っています。平成26(2014)年、中世の古麓城跡、安土桃山時代の麦島城跡と併せて、「八代城跡群（やつしろしろあとぐん）」として国の史跡に指定されました。平成29(2017)年には、「続日本100名城」にも選定され、春は桜の名所としても市民に親しまれています。

ここにも行ってみたい♪

日本遺産周辺のおすすめお立ち寄りスポット

地域のやさしさがギュッと詰まった施設

東陽交流センター せせらぎ

農家直送野菜を使った野菜レストランや物産館を兼ね備えた施設です。特筆すべきは、スタッフが早朝から焼き上げる手作りパン。40種類を超えるラインナップを誇り、早い日にはお昼を待たずに完売するほどの人気なのだとか。掛け流しの天然温泉も併設されており、地域の憩いの場としても愛されています。

ここでしか食べられない「生姜きんぴらパン」や「おいしい食パン」など、遠方から予約して買いに来るリピーターも!

お肌すべすべのアルカリ性単純温泉の天然温泉があふれる「夢あかり」。

ショウガやトマトをはじめ、東陽町の特産品が並ぶ直売所「菜摘館」。

八代市東陽町南1051-1　☎0965-65-2112
営 温泉／10:00～20:00(最終受付19:30)、お土産・菓子工房／10:00～19:00、直売所／7:30～18:00、レストラン／11:00～15:00(OS14:00)※夜は予約のみ営業
休 温泉・レストラン・直売所・菓子工房／水曜日(祝日の場合は翌日)、直売所／第2・4水曜日(祝日の場合は翌日)

石工の技術を肌で感じる博物館

石匠館(せきしょうかん)

天然の石壁でできた建物が印象的な「石匠館」は、日本で初めての石工とめがね橋の博物館です。種山石工・橋本勘五郎や岩永三五郎をはじめ、日本全国の石橋にまつわる事柄を知ることができます。なぜ熊本にめがね橋が多く架橋されたのか、重い石をどうやって運んだのかなど、多くの疑問を解き明かせる絶好のスポットです。

石橋づくりの基礎となる「支保工模型」は博物館のシンボル。

石工たちの仕事ぶりを再現したジオラマ模型。

世界的建築家・木島安史氏が八代のめがね橋文化をイメージして設計した「石の建築」。

八代市東陽町北98-2　☎0965-65-2700
営 9：00～16：30(入館は16：00まで)　休 月曜日(祝日の場合翌日)、年末年始
料 大人310円、高・大学生200円、小・中学生100円

心身に沁みわたる古き良き湯治の湯

日奈久温泉(ひなぐおんせん)

効能豊かな弱アルカリ単純泉のお湯があふれ、湯治場のような雰囲気が漂う熊本県最古の温泉地。

約600年前、神のお告げによって温泉が湧き出たと伝わる日奈久温泉。昔ながらの町湯の風情漂う立ち寄り湯をはじめ、国登録有形文化財の木造建築の温泉宿まで、かつての湯治場の面影が残っています。放浪の俳人・種田山頭火もこの温泉に魅入られ、(行乞記)書き記したように、心身をじっくり癒してくれる湯があふれています。薩摩藩主が参勤交代の宿場として利用したとの記録もあり、干拓事業に携わった石工たちも、疲れた身体を癒したかもしれません。

築百年を超える木造三階建ての旅館などもあります。

お問い合わせ／
日奈久温泉観光案内所　☎0965-38-0267　八代市日奈久中町516

肥後花菖蒲の花が咲き誇る風趣な庭園。6月の第1日曜日には、肥後古流のお茶会も催されます。

旧熊本藩の筆頭家老が創建した風趣な御茶屋

国名勝 松浜軒(しょうひんけん)

旧熊本藩の筆頭家老・松井家に伝わる優美で気品あるおひなさまやひな道具の数々。

元禄元(1688)年、八代城主松井直之公が建てたお茶屋です。当時この辺りには松が茂り、八代海を見渡せる浜辺であったことから松浜軒と名づけられたのだとか。松井家に伝わる家宝を展示する松井文庫や、宮本武蔵ゆかりの軸や手彫りの木刀などは一見の価値あり。松井家に伝わる優美な「おひなさま」の展示(2～3月)や、肥後花ショウブ(5月下旬～6月上旬頃)も見応えがあります。

八代市北の丸町3-15　☎0965-33-0171
営 9:00～17:00 (入園は16:30まで)　休 月曜日 (祝日の場合は翌日)
料 大人500円、小・中学生 250円

八代の特産品

干拓地や棚田など独特の地形が生んだ八代の特産品はお土産にも最適！

い草及びい草製品

日本遺産の物語を構成する文化財のひとつ「い草およびい草製品」。畳き畳やいぐさマットはフローリングの洋間にもマッチし、いぐさを使った小物類は日常生活の中でちょっとした落ち着きを与えてくれます。

トマト

土壌塩分濃度が高い干拓地で栽培される八代のトマトは、糖度が高く、海水のミネラル分たっぷりの風味、しっかりした歯ごたえが特徴。冬場の生産量は日本一、八代が誇る高級食材です。

晩白柚（ばんぺいゆ）

八代地方を代表する特産品で、直径が約25cmにもなる世界最大級の柑橘です。香りが良く、さわやかな甘酸っぱい香り、果肉はサクサクとした食感で、甘みと酸味のバランスが絶妙！厚い皮は砂糖漬けにもGOOD。保存性が高く、贈答品にもおすすめです。

ショウガ

八代市東陽町は熊本県有数のショウガの産地。日本遺産にもなった美生地区の棚田をはじめ、山あいの段々畑で育つショウガはずっしりと重く、大玉で香り高いのが特徴です。

八代市へのアクセス

新幹線

新大阪 ―（約1時間30分）― 広島 ―（最速 1時間59分）― 新八代 ―（約45分）― 鹿児島中央

新大阪 ―（最速 3時間27分）― 新八代

広島 ―（約1時間5分）― 博多 ―（約50分）― 新八代

鉄道／JR九州・肥薩おれんじ鉄道

別府 ―（約4時間30分）（九州横断特急・熊本乗り換え）― 新八代

別府 ―（約30分）（JR鹿児島本線）― 熊本 ―（約5分）― 八代

別府 ―（約40分）（JR鹿児島本線）― 熊本

八代 ―（約1時間20分）（肥薩おれんじ鉄道）― 出水 ―（約1時間10分）（肥薩おれんじ鉄道）― 川内

高速道路

福岡IC ―（約20分）― 鳥栖JCT

長崎IC ―（約1時間20分）― 鳥栖JCT

佐賀大和IC ―（約20分）― 鳥栖JCT

大分IC ―（約1時間30分）― 鳥栖JCT

鳥栖JCT ―（約1時間12分）― 八代IC ―（約50分）― えびのJCT

えびのJCT ―（約50分）― 鹿児島IC

えびのJCT ―（約1時間）― 宮崎IC

飛行機

東京羽田 ―（約1時間55分）― 阿蘇くまもと空港

大坂伊丹 ―（約1時間5分）― 阿蘇くまもと空港

名古屋小牧 ―（約1時間5分）― 阿蘇くまもと空港

名古屋中部 ―（約1時間25分）― 阿蘇くまもと空港

阿蘇くまもと空港 ―（約45分）空港直行高速バス すーぱーばんぺいゆ号― 新八代駅

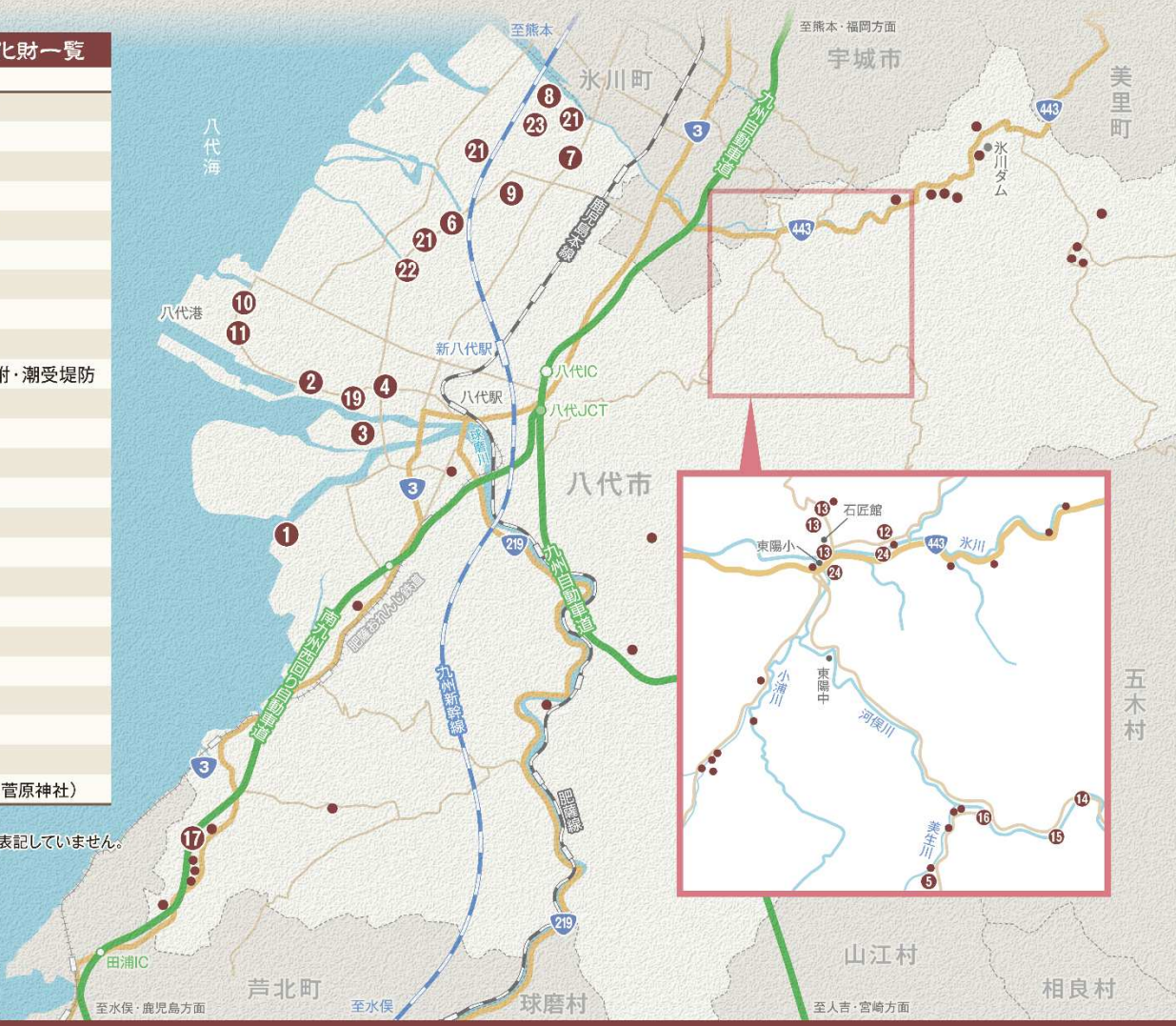
空港～八代へらくらく直行便
すーぱーばんぺいゆ号

阿蘇くまもと空港～
新八代駅～八代駅～各ホテル

物語を構成する文化財一覧

	名　称
❶	水島（不知火及び水島）
❷	白島
❸	麦島城跡
❹	八代城跡
❺	美生地区の生姜棚田
❻	大鞘樋門群
❼	鑑内橋
❽	岩永三五郎の墓
❾	文政神社
❿	旧郡築新地甲号樋門 附・潮受堤防
⓫	郡築二番町樋門
⓬	白髪岳天然石橋
⓭	鍛冶屋上・中・下橋
⓮	鹿路橋
⓯	笠松橋
⓰	谷川橋
⓱	赤松第一号眼鏡橋
⓲	めがね橋群
⓳	橋本家文書
⓴	い草及びい草製品
㉑	大鞘節／大鞘名所
㉒	女相撲
㉓	芝口棒踊り
㉔	ひねり灯籠（若宮神社・菅原神社）

※⑱は●で表記。
⑳は八代市一円のため地図に表記していません。



文化庁
令和2(2020)年度文化芸術振興費補助金
(地域文化財総合活用推進事業)

お問い合わせ／八代市日本遺産活用協議会事務局（八代市文化振興課内）TEL.0965-33-4533